

TEIKA NEWS LETTER

Teikyo University of Science

VOL.
35



TEIKA Field Museum
OPEN AIR LAB®



Living
in
harmony
with
nature





活動内容

こんな活動をしています！



1 ゆるだんっ!
OPEN AIR LABの教職員が、卒業生、友人、同僚教員などと「ゆるく」語り合います。在学生や卒業生、そのご家族はもちろん、高校生の参加も大歓迎です。これまでのダイジェストをYouTubeでご覧いただけます。写真は、インタープリターとして活躍中の卒業生・金崎さんと、同じく卒業生の学芸員が「ゆるく」対談しているところです。YouTubeはこちら▶



2 ちょっと真面目なリレートーク
すぐには答えの出ない問いを、教員たちがそれぞれの専門分野に引きつけて「真面目」に議論しています。写真は、アニマルサイエンス学科の佐渡友先生がオーガナイズし、こども学科の小湊先生が話題提供くださった会の様子です。



3 プリコラシネマ
月に一度のペースでドキュメンタリー映画の上映会をしています。上映後には、参加者で感想を交換し合っています。それは、映画以上に、この企画の魅力となっているかもしれません。いろいろな人の個人的経験や考えから出てくる意見を聞くことには、いつも発見と驚きがあります。



4 自然観察会
遠くに行かなくても、キャンパスの周りを歩くだけで驚くほど多くの生き物に出会えます。必要なのは「好奇心」と「気持ちのゆとり」そして少しの「知識と経験」。周囲の自然のことを知れば、その分だけ生活の楽しみが増えます。そのきっかけになれるよう「自然観察会」を開いています。写真は、夜のキャンパスの自然をテーマにした観察会の様子です。



5 ビオトープ
ある学生が、かつてキャンパス内に穴を掘りました。それがいまや魅力的で素晴らしいビオトープに育ちました。ビオトープは里山と同じく、人と生き物の関わりによって多様性が維持されています。写真は、実習で泥上げを行なっているところです。



帝京科学大学附属 フィールドミュージアム



OPEN AIR LAB®

「OPEN AIR LAB」とは、本学附属のフィールドミュージアムです。「建学の精神」のひとつである「自然との共生」を理念に掲げています。山梨県にある東京西キャンパスを活動拠点とし、自然の中で暮らす喜びを学生や市民と一

緒に発見し・作り出し・分かち合うとともに、地方や田舎で暮らしたいと考える若者を応援しています。居住地や暮らし方の多様化は、個人の幸福とともに、日本の社会や文化における創造性を維持し高めることにもつながるでしょう。

地域とつながる



まちの上の朝市
うえのはら / uenohara

OPEN AIR LAB 館長
荻田 慎司 教授

「自然との共生」の輪を広げるための交流の場として、地域市民の方と共同で開催しています。野菜、食品、輸入雑貨、クラフト、古道具など、多様で魅力的なお店が出ています。学生によるワークショップがあったり、大学の馬も時々やってきたりと盛りだくさんです。開催日や出店者情報はInstagramをご覧ください。

場所：帝京科学大学東京西キャンパス 実験棟棟ロータリー、プリコラ
詳しくはこちら▶



周囲の豊かな自然すべてがフィールドです!

周辺環境



キャンパスの周囲の自然
東京西キャンパスのすぐ側には、富士山麓を源流とする桂川(相模川)が流れています。北には秩父山地が、南には丹沢山地が広がっています。航空写真を見れば、キャンパス周辺にはどこまでも緑が広がっていて、深く豊かな自然の世界に抱かれていることがわかります。「自然との共生」について学ぶのに、素晴らしい環境です。



プリコラ

フィールドワーク基地・プリコラ!

プリコラは、OPEN AIR LABの象徴的施設。その名は「ありもの使いの知恵」を意味する「プリコラージュ」から取りました。

「プリコラ」概要



内部は地域の古い建物の建材と建具を活用して作られ、教員提供の調査機材、標本、地域の生物などが展示されています。学生は、勉強したり、友人と話したり、昼寝したりと自由に使うことができます。研究会やワークショップなども開かれており、市民の方の利用も可能です。学芸員が常駐しています。

ドッグウェルカム



イヌは人と自然をつなぐ動物のひとつであり、イヌとの共生も大切なテーマの一つです。この写真は、コンパニオンアニマルセンターの「麦」というイヌが朝市に来た時の1枚。アニマルサイエンス学科のドッグマナー試験に受かったペア(人とイヌ)であれば、プリコラをイヌと一緒に利用できます。

テラスのぶどう



南側テラスでは、日本で最も古いぶどう品種「甲州」が育っています。苗木は、甲州市の伝統あるワイナリーである勝沼醸造さんからいただきました。

カフェ@プリコラへようこそ!



地域の食材を使ったケーキやドリンクを提供しています。コーヒーは、地域のお茶屋さんで輸入・焙煎しているフェアトレードの豆を使用。タンザニアとコスタリカの野生動物保護を支援する意味もあります。今は週に2~3日の営業ですが、ゆくゆくは毎日営業できるように頑張っています。

実際に見て!体感しよう!

個別キャンパス見学実施中!

キャンパスに来ていただき対面で説明を聞いたり施設見学を行う、対面型個別キャンパス見学(事前予約制)の受付を行っています。電話またはメールでお申し込みください。

詳しくはこちら▶



TEIKA NEWS LETTER

TEIKA NEWS LETTER

教員活動報告

— 授業・研究における学生たちとの過ごし方 —

新型コロナウイルス収束の目途が立たない中、感染対策と学習効果を両立できる最適な環境の整備に大学全体で取り組んでいます。各学科の対面授業・オンライン授業ならびに特色を活かした活動をご報告いたします。

生命環境学部 Faculty of Life & Environmental Sciences

アニマルサイエンス学科

Department of Animal Sciences

古瀬 浩史教授

アニマルサイエンス学科・東京西キャンパスのカリキュラムの特長として、3年次前期の実習があります。この実習では、自分の専門コース(アニマルサイエンスコース、野生動物コース、アニマルセラピーコース)について、じっくり学びます。教員たちは、この実習で、学生の生き生きとした姿を見ることができます。

写真は、野生動物コースの「ピオトープ実習」です。キャンパス内の池の生物を調査し、生物多様性を高めるために、泥上げによる水質の改善、植生の管理、外来種の駆除、地形の修整などを行います。キャンパス内での実習なので、作業の結果、生物相がどのように変化していくか、自分の目で確かめることができます。



自然環境学科

Department of Natural & Environmental Science

森長 真一准教授

私たちが暮らす地球上には、赤道から極域まで、あるいは高山から海中までの至る所に、たくさんの植物が生育しています。それらは何十億年に渡る進化の結果であり、たった一つの共通祖先から現在のような姿形に多様化してきました。私の研究室ではこのような植物の多様性と共通性に着目して、山岳・森林・草原・海岸・河川・都市などを舞台に、さまざまな手法を用いて研究を行っています。研究テーマは大きく分けて、「植物と動物の送粉・被食相互作用」、「植物の遺伝的分化と環境適応」、これらの知見を活かした「野生植物の保全」の3つです。日々、研究室の学生たちと楽しみながら、また協力しながら(発信者の許可を得てSNS上の画面を掲載)、研究活動に取り組んでいます。



生命科学科

Department of Life & Health Sciences

上野 良平准教授

コロナ禍が収束していない現状でも、安全面に配慮しながら、授業、セミナー、実習、および学内イベントを対面(一部オンライン)で実施できるようになりました。これに伴い、本学への進学を視野に入れた高校生達が、オープンキャンパスや課題研究を目的として、本学キャンパスを訪れる機会も復活しています。生命科学科の学生達も、高校生の学習支援を行いながら、彼らの信頼関係を構築することができました。このように「対面で何かを教える」機会をもつことは、中学校・高校の理科教員を目指す学生にとって良い刺激になっています。また、卒業研究においては、学生と共に微生物の野外調査も行っています。



オープンキャンパスでの一コマ

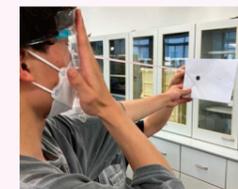
医療科学部 Faculty of Medical Sciences

理学療法学科

Department of Physical Therapy

新永 拓也助教

理学療法では、人の行為を自立させるために運動療法と物理療法を実施します。人の行為は、関節運動や筋収縮を繰り返し、身体活動が適切に実施されることで成り立ちます。また、身体活動に伴い人体各所で生理的な反応も生じることも忘れてはいけません。私たち理学療法士は、基本的な生体反応を知った上で運動療法を実施します。本学科には「人体の構造と機能Ⅲ実習」という解剖学・運動学・生理学の知識を活用し、生体の反応を自らの目で直接観察する科目があります。学生は、仮説の設定や実験の検証、結果の解釈、さらにレポート報告といった一連の実験手法を学ぶだけでなく、グループでの実験を通してリーダーシップや協調性も培っています。



作業療法学科

Department of Occupational Therapy

石井 孝弘教授

今年度から、新たに「動物介在療法のための感覚統合」「乗馬療法技術概論」が3年生の選択科目としてスタートしました。理学療法学科、作業療法学科、アニマルサイエンス学科の学生が受講しています。本学は自然環境と動物、リハビリテーション、教育を学ぶことができ、動物介在療法や乗馬療法を学ぶための学修環境においては、他大学にはない素晴らしい環境が整っています。私が専門とする乗馬療法は、海外では支援方法の一つとして以前より行われていました。日本ではまだこれからの分野で、現在は発達支援として主に障害のあるお子さんや、生活の中での困りごとのあるお子さんへの支援方法として広まっています。本学はこの分野に関わる専門家になるための学修が可能です。日本の中でも先駆的な取り組みを行っていると言えます。



柔道整復学科

Department of Judo Therapy

加藤 一雄特任講師

少人数制できめ細かい対応、学生一人ひとりの将来の目標に合わせた指導教育を心がけています。授業では、実践が身につくよう理論と実技を組み合わせで行います。整骨院を開業して40年以上の経験を活かし、日々来院される患者様の症例を紹介しながら臨床時の心得、施術方法、指導管理などを教えています。学生は専門的な知識技術が必要とされる整復法、固定法、手技療法などの修得に初めは戸惑いますが、回を追うごとに意欲的な姿、積極的な質問がみられます。また、コミュニケーションを取り意識を高め合うことで、学び成長しています。授業を通して、生涯研鑽を積み、社会に貢献できる柔道整復師の育成を目標として学生に寄り添っていきたくと思います。



医療科学部 Faculty of Medical Sciences

東京理学療法学科

Department of Tokyo Physical Therapy

廣瀬 昇准教授

現在行われているゼミ活動では、積極的な対面活動が可能となり、臨床現場でも活用されている専門書を用いた輪読会や医療技術を習得するためのグループ練習、大学院に在籍する現職理学療法士の研究サポートを通じたキャリア形成など、週1~2回のペースで活動することができるようになりました。このような相互交流は学年を超えた開催も少しずつ実施できるようになってきております。

理学療法士に求められる資質はいくつかありますが、特にコミュニケーション能力は重要な資質のひとつとして捉えられています。同じ空間で時間を共にする学生間での取り組みは、お互いの感性や考え方を共有する楽しさを再認識し、コロナ禍では実現出来なかった「刺激合う学び」を取り戻すことができていると感じています。



東京柔道整復学科

Department of Tokyo Judo Therapy

浅木 健治助教

「学びたい」という思いを強くもつ学生に対し、カリキュラム外で有志への補講(生理学)を実施しています。補講の目的は「学生に学びの面白さを実感してもらい、そこから新たな学びへの意欲や原動力に繋げていく」こと。学生が学びへの興味・関心を持てるように、イラストや動画などの視覚情報を多く盛り込んだ資料を作成し、これをもとに講義を進めるとともに、講義内では実体験と学修内容がリンクするような話を盛り込むよう心がけています。学生にとっては長いようであるという間の大学生活です。限られた大学生活の時間で、少しでも学びの面白さを実感でき、今後も学びを継続していきたいと思えるようなきっかけとなる補講にしていきたいと思っております。



看護学科

Department of Nursing

大釜 信政准教授

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って、看護の知識・技術・態度の統合を図り、実践能力を現場で育成するための臨地実習に大きな影響が出ています。こうした状況の中で、本学看護学科が文部科学省大学改革推進等補助金「ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」に選定されました。この助成を受けたことで、最新の高機能患者型シミュレータや、看護実践を客観的に振り返るための動画記録機器などを、整備することができました。学生は、さまざまな看護場面に対応するために、充実した環境の中で学修に動いています。教員も、ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる看護職の養成の推進に向けて、一層のこと教材研究に力を注いでいます。



医療福祉学科

Department of Medical Welfare

加藤 洋子教授

医療福祉学科では、3年次では専門教育として、病院や在宅医療診療所で実習と事前事後学習をします。さらに4年次で医療ソーシャルワーカー実習前教育を受け、病院・在宅医療診療所等で実習を行います。医療ソーシャルワーカーとは、病院・在宅医療を受ける患者さんや生活困難を抱えた人に、活用できる制度等の情報を提供し、支援を行う専門職です。国は、病院を退院し、自宅療養となった後も、住み慣れた地域で住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」を推進しています。そこで求められるのが、病者の生き方を尊重し、暮らしや医療をコーディネートする相談者、医療ソーシャルワーカーです。本学科では独自の取り組みとして、医療ソーシャルワーカーとしての実践力を培い、社会貢献できるよう専門職養成をしています。



ドイツのお客様と重心施設の見学

教育人間科学部 Faculty of Education & Human Sciences

こども学科

Department of Child Science & Education

前嶋 深雪教授

「初等教育実践演習I」ではサービラーニング*の手法を用いた授業を展開しています。上野原市の社会資源である多様な市民活動の場(「高齢」「子育て」「子どもの学びと育ち」「地域」など)での活動を通して、体験と学びをつなげていきます。実践演習は夏休み中に行われますが、今年は前期最後の授業にて、実践演習先のひとつで地域猫活動をされている「上野原どうぶつ会」の方をお招きし、「プリコラ」でお話しをしていただきました(写真)。

※「サービラーニング」については、本授業では「サービス(貢献活動)とラーニング(学習)をつなげ、ボランティア活動を学外で行い、その活動体験を通して学びを獲得することを旨とする教育手法のこと」と説明しています。



幼児保育学科

Department of Early Childhood Education & Nursing

今西 ひとみ准教授

地域研究活動の一環として、学科の支援を受けている幼児保育学科ボランティアグループ「おもちゃのチャチャチャ」の学生たちが、令和4年4月から本格的に活動を始めました。3年生リーダーが中心となって積極的に1年生を指導しながら、空き時間や空き日を利用して、現場での就職や実習を想定し行っています。

活動内容は、保育園から依頼される子どもたちのお散歩サポート、掃除や片付けなど保育施設の整備、さらに子どもたちの遊びの支援などが主ですが、学生にとって何よりもこの時間は、地域の子どもたち、先輩保育者の先生方に直接にふれあえる貴重な時間です。教員から見ても、本人たちが感謝して有意義に取り組みしている様子が間近に見られる、意義のある活動となっています。



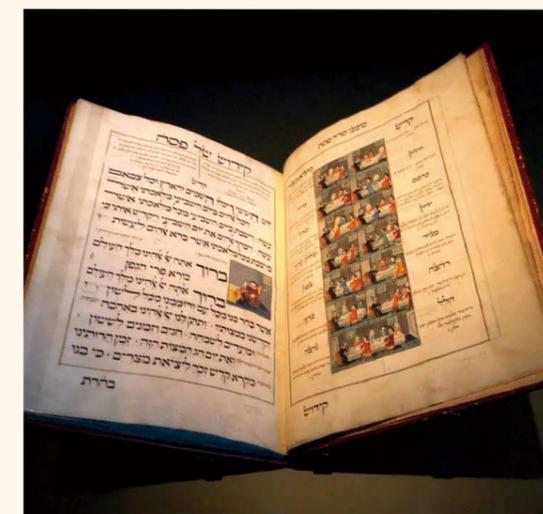
学校教育学科

Department of School Education

櫻井 丈講師

今年度担当の「Integrated English Communication III/IV」では授業を原則全て英語で行っています。語学の授業ではありませんが、授業はなるべく米国の大学で扱っている内容に準じた形で行っています。英語教員を目指す学生達には授業を通して、文化、宗教、民族、人種といった異文化理解に不可欠な人文社会科学の概念について英語で理解、説明、議論させ、物事を批判的に考える力を身につけてほしいと思っています。

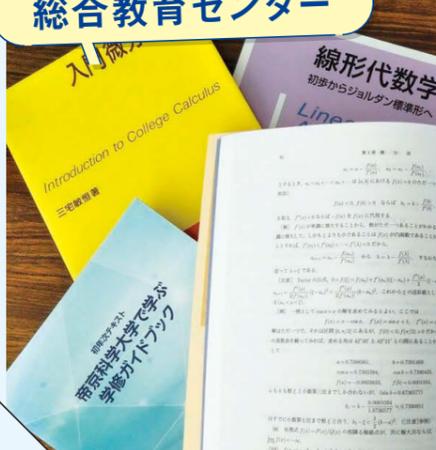
こうした体験から英語は単なる学校で学ぶ教科ではなく、生活に密着した言語であり、相手とのコミュニケーションを図る道具であり、又当該話者の文化、歴史そのものであるということを学生達が理解できたと思います。好きこそ物の上手なれと言いますが、英語を使えば使うほど、学生達はその面白さに惹かれていき、少しずつではありますが、自身の英語力に対して自信をつけてきているようです。



「まなび」を支える

3つのセンター

総合教育センター



さまざまな分野で活かせる、汎用性の高い教育を目指して

松本 ディオゴけんじ 講師

総合教育センターでは、全学における共通科目および教養科目を担当しており、理系・文系を問わずさまざまな分野における専門の先生方が所属しています。私が担当するのは数学I、数学II、統計学といった数学科目です。数学Iと数学IIでは、微分積分と線形代数という、数学を扱う際に基本となる内容を学びます。受講者の中には高校までの数学が得意でない学生もいるため、講義では高校の復習も含めて丁寧に説明するように努めています。また、他の科目とのつながりも意識し、効果的な教育ができるように試行錯誤しています。昨今、ますます数学の重要性は増えています。将来、数学が必要となったときに役立つ知識を提供し、数学に興味を持つきっかけを作りたいと思っています。

教職センター



教育への理解を深めながら、教員になる力を養う

福田 八重 講師

教職センターでは、教員になる学生や、教員免許を生かして子どもと関わる仕事を目指す学生を支えています。授業では、実際に教員になる力をつけるべく、教員が行う取り組みを実体験します。例えば、小中高等学校の図書室では、教員自身のおすすめ本の書評を図書室に掲示し、児童生徒の利用を促進します。そのため、2年生の学生には、毎年、書評を書いてもらい、それを後輩の1年生が審査、講評します。1年生が審査をするのは、教員になった時に、児童生徒の作品を審査し講評をおこなうからです。また、学校でのインターンシップやボランティア活動で、子ども、学校、教育への理解を深めています。足立区立千寿双葉小学校では、教職課程を履修する生命環境学部・教育人間科学部の学生が、地域の高齢者の方と協力して、児童のニーズを大切にしながら学習支援をしています。ここでは、地域の方も学校の支え手であることを学んでいます。

医学教育センター



国家試験対策だけでなく、現場での活躍を見据えた教育を

センター長 高田 雄三 教授

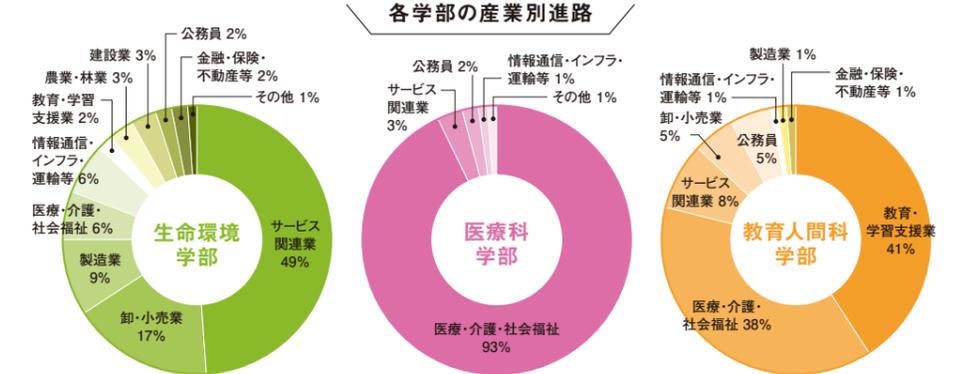
医学教育センターの教員は、基礎医学や臨床医学に対して、最新の研究や自身の研究成果、医療現場での診断、治療から得られた知識や経験をもとに、各学科の教員と連携して講義および国家試験対策に取り組んでいます。また、アクティブラーニングやグループ学修といった多彩な教育を通して、自主性があり周囲と協調した連携がとれる優れた医療人になるための土台をつくり、あらゆる可能性を想定した柔軟な発想で問題解決できる応用力や臨床実践力を修得できるように努めています。そして、国家試験に合格することのみならず、社会で活躍し、医学と医療の発展に寄与できる人材を社会に送り出したいと考えています。

キャリア支援センター

親身な面談や充実した情報提供など、多角的なサポートによって学生の夢を手厚く応援。在学中はもちろん卒業後まで、一人ひとりに寄り添うキャリア支援を行っています。

1 / 就職実績 (2022年3月卒業実績)

2022年3月卒の学生は、コロナ禍ではありましたが、オンライン就活にも慣れ、積極的な就職活動を展開しました。生命環境学部では、特に「動物」、「環境」、「食品」がキーワードの業界に志望が集まり、そのなかでも「販売・接客系」の仕事に多くの学生が就職します。医療科学部は、全体の9割以上の学生が医療系の仕事を選択しています。教育人間科学部は、全体の約8割の学生が教員(幼稚園含む)、保育士等の進路を選択しています。



2 / 就職率

2022年3月卒業生の就職率は94.2%で、前年比プラス0.2%増です。企業の若年層の採用意欲の強さが反映し、ここ数年の中でも最も高い数値です。就職活動への取り組みが遅い学生は、進路選定に苦勞する傾向が見えますが、早期に就職活動に向き合った学生は、自己理解、企業研究が進み、早期に進路が決定しています。

4 / 本学の取り組み

キャリア支援センターは、学生の「進路」を学生と一緒に考える場所です。一般企業、医療、教育、保育と学生が進むキャリア選択は多様です。学生一人ひとりの「想い」に寄り添いながら、就職対策講座等のガイダンス、学内業界セミナー等、学生のキャリア支援に取り組んでいます。

3 / コロナ禍での対策

コロナ禍において就職活動のオンライン化が進みました。キャリア支援センターで実施するガイダンスや学内業界セミナーなどは、オンラインのライブやオンデマンドでも配信し、学生が参加しやすい環境を提供しています。

5 / 本学学生の特徴

企業・施設様等から「真面目」、「素直」、「努力を惜しまない」等の評価をいただいています。さらに、「積極性、行動力を高める」ことを目指し、学生が社会に巣立った後も困らないよう、ガイダンスや面談を通じて指導を続けてまいります。

大学院 | 科学技術・医療の教育研究を通じて、広く社会人と人類の発展に貢献することをめざす



Student

理工学研究科 バイオサイエンス専攻 修士1年 井形 早希さん



学部生時代から研究や実験に関心があった私は、さらに専門的な知識や実験の技術面を学ぶために大学院に進学しました。現在は、がん細胞の転移や増殖するメカニズムを抑える方法についての研究を行っています。今後は研究の内容をより濃いものにし、得た知識を発揮できるような場所で、誰かの役に立てる仕事に就きたいです。
(2022年 生命環境学部 卒業)

Professor

理工学研究科 バイオサイエンス専攻 山田 秀俊 講師

井形さんは、学部生の頃から「がんの増殖と転移」に興味を持ち、私の研究室で「食品成分によるがん細胞の増殖抑制」の研究に取り組んでいます。井形さんと取り組んでいる研究は、がん研究の分野に一石を投じる研究になると考えています。医療分野での活躍を目標に大学院に進学した井形さんには、今後も大学院の学びと研究活動に積極的に取り組みながら、自らの進みたい道に積極的にチャレンジし続けてほしいです。

医療科学研究科

修士課程 2年	<ul style="list-style-type: none"> ■ 総合リハビリテーション学専攻 ■ 柔道整復学健康ケア専攻 ■ 看護学専攻
博士課程 3年	<ul style="list-style-type: none"> ■ 総合リハビリテーション学専攻

理工学研究科

修士課程 2年	<ul style="list-style-type: none"> ■ アニマルサイエンス専攻 ■ 環境マテリアル専攻 ■ バイオサイエンス専攻
博士課程 3年	<ul style="list-style-type: none"> ■ 先端科学技術専攻 ・ アニマルサイエンス領域 ・ 環境マテリアル領域 ・ バイオサイエンス領域

取得可能な教員免許状

※先端科学技術専攻・医療科学研究科は除く

- 中学校教諭 専修免許状(理科)
- 高等学校教諭 専修免許状(理科)

Go to See Graduates.

卒業生に会いに行く。



生命環境学部
アニマルサイエンス学科
2011年3月卒業
県立牛久高等学校(茨城県)出身
渡邊 智之さん

「自然と人をつなぐ写真家」活動する傍ら、ニコカレッジの講師も務める。キツネやタヌキなどの生態や、動物と人との関わりを撮影し、現代社会では見えにくい「自然とのつながり」を伝えている。ホンドギツネについての初の写真絵本「きみの町にもきっといる。となりのホンドギツネ」(文一総合出版)発売中。

「自然と人をつなぐ写真家」の原点となった、学生時代の経験

振り返ってみれば、写真家としての原点は、TEIKAでの経験にあると思います。初めてカメラを触ったのも、所属していた環境教育研究部のサークルがきっかけでした。サークルの仲間と遠方まで旅行に出かけて生き物を探し、撮影する中で、生き物と向き合うことの楽しさを学びました。

サークルでは、小学校の課外活動の時間を借りて、校外学習を企画し、教室の一室で自然環境に関する展示活動を行ったこともあります。その経験から、卒業後は山梨県の県立科学館に勤務しました。しかし、「自分の行動で、自然環境と人とのつながりを見せられるような活動がしたい」という思いが徐々に芽生え、学生時代のカメラ経験を思い出し、カメラマンへの転身を決意しました。生き物と向き合い続けたサークルでの経験が、「自然と人をつなぐ写真家」という、現在の活動の軸になっていると感じています。

TEIKAは、ユニークな人が多い大学。自分とは違うことに興味を持っている人や、自分とは異なるものの見方をする人も多く、たくさんの刺激を受けました。さまざまな視点を持つ人と接したことは、新たな考え方や広い視野を培うきっかけになりました。自分の世界を広げてくれるものは、自分の興味の外側にあるかもしれないこと、そして、時に無駄だと思えるような物事の中に、大切なものが隠れていること。TEIKAで出会った仲間たちから学んだことです。



多くの物事に触れ、興味の幅を広げていく。積極性を築いた4年間

生き物の撮影は、まず自分を認識してもらうところから始まります。毎日同じ時間、同じ場所に、同じ格好で、数カ月かけて通い、顔を覚えてもらう。警戒心を抱かれず、カメラの前で自然な行動をしてもらうための、欠かせない準備です。根気と体力のいる仕事ですが、生き物を追って撮影していると、生き物の視点で街を見られるようになるのが面白いですね。そして撮影した写真を見てくれた人が、「視点や興味の幅が広がった」と言ってくると、やりがいを感じます。

それは指導者の立場としても同じ。受講した生徒の日常に、少しでも新たな視点が生まれるような講座になるよう、意識して企画しています。サークルでの企画制作経験がこのような形で役立つとは、想像もしていませんでした。大学時代、少しでも興味のある分野に積極的に関わっていく大切さを知れたことは、さまざまな視点を持つ教授や学生の多い、TEIKAだからこそできた経験だったと思います。



両親への手紙



普 段はなかなか言葉にできない両親への感謝の気持ちを伝えるために、この手紙を書きました。今日までの22年間、私を支え、育ててくれてありがとうございます。私には、我慢できることがあります。それは、優しく、面白く、頼りになる友人がたくさんいることです。私は、人から「しっかりしているね」「人柄がいいね」とよく言われます。これは、私の力だけでなく、両親の影響が大きいのと思います。相手を思いやり、真面目にコツコツ努力することの大切さを、両親の姿から学びました。こうした姿勢を大切にしていることが、私が多くの友人に恵まれた要因なのだと思います。努力している人を支えたい、励ましたいという思いは、

教員を目指すきっかけにもなりました。教員として、人に支えられるだけでなく、人を支える人間になり、我慢できる友人だけでなく、我慢できる生徒を育成していきたいです。お父さん、お母さんは私のことをこれからも支え続けてくれることでしょう。でも、いつの日か、私がお父さんとお母さんを支えられるようになりたいと、心から思っています。ほんの少しだけでも、「自慢の息子」になれたでしょうか？感謝の気持ちを忘れずに、これからも努力を重ねていくので、いつまでも、元気でいてください。「ありがとう」の気持ちを込めて。

翔太より。

教育人間科学部 学校教育学科 中高理科コース 4年
県立柏中央高等学校(千葉県)出身

佐相 翔太さん

SHOTASASOU



帝京科学大学学園祭 University Festival

※開催についての最新の情報は本学HPをご確認ください。

科大祭 (東京西キャンパス) TOKYO WEST CAMPUS



第32回 科大祭実行委員長 矢口 弥空

こんにちは! 科大祭実行委員会です。今年の科大祭は、10月15日(土)の1日のみ、規模を縮小しての開催です。コロナ禍での度重なる中止によって、今回は学生全員が科大祭を経験していない状態での開催となり、不安な部分もあります。しかし、そんな不安も吹き飛ばすくらい、笑顔で活気あふれる科大祭にするつもりで、日々開催に向けて準備しております。ステージ企画や模擬店など、さまざまなイベントを企画しておりますので、ぜひお越しください。科大祭実行委員一同、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

桜科祭 (千住キャンパス) SENJU CAMPUS



第12回 桜科祭実行委員長 岡田 隆大朗

昨年はオンラインでの開催でしたが、本年度の桜科祭は対面開催の方向で進めています。この決断は、桜科祭メンバーを初めとする多くの方々のご協力あってのものです。この場をお借りして感謝申し上げます。コロナ禍で大変なことも多くある学生生活ではありましたが、桜科祭が一つの思い出になれるようさまざまな企画を行う予定ですので、ぜひ遊びにいらしてください。皆様のご来場を心よりお待ちしております!

※新型コロナウイルスの感染状況により、開催方法が変更になる可能性があります。詳しくは桜科祭実行委員のホームページやSNSからご確認ください。

編集 後記

本号では、東京西キャンパスに設置されている附属ミュージアムOPEN AIR LABを紹介しています。東京西キャンパスの方はもちろんのこと、千住キャンパスの方にもぜひ足を運んでいただければと思います。また、教員の活動報告では、授業や研究を通しての学生たちとの過ごし方や、学生がキャンパスで大学本来の学びを進めている様子を紹介しています。教育研究環境のいっそうの充実を教職員一同目指しております。引き続きのご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

[ニュースレター部会長 渡邊 浩一郎]

いのちをまなぶキャンパス

 帝京科学大学

[発行人]
帝京科学大学 学長 沖永 莊八
〒120-0045
東京都足立区千住桜木2-2-1
TEL: 03-6910-1010(代表)

